

第107回全国高校野球選手権青森大会

聖愛、4年ぶり3度目夏の甲子園へ



最終日

第107回全国高校野球選手権青森大会最終日は24日、弘前はるか夢球場で決勝を行った。八学光星は弘学聖愛に5-6で敗れ、2年ぶりの栄冠を逃した。弘学聖愛は4年ぶり3度目の優勝。

両チームによる夏の決勝は6年ぶり4度目。これまではいずれも八学光星が勝利したが、今回は九回に逆転した弘学聖愛に軍配が上がった。(取材班)

決勝

弘学聖愛 000 001 005 | 6
八学光星 200 000 102 | 5

(弘) 芹川、水木海、田中志、前田一成田、石山

(八) 北口、柴田、及川、佐藤一米澤

▷二塁打 光田、山上(八)

▷試合時間=3時間13分

(球審=澤田、塁審=梅田、立花、長内)

【評】弘学聖愛が逆転勝利を収めた。2点を追う九回、石澤、菅野の適時打で同点に。なおも2死二、三星の好機で一戸の中前適時打で勝ち越し、丸岡の中前適時打で突き放した。先発芹川は6回途中3失点と粘投した。

八学光星は先発北口が7回1失点と好投したが、九回に救援陣が打たれた。打線はその裏に山上の適時二塁打で1点差に詰め寄ったが、逃げ切られた。

【弘学聖愛】打安点振球

菅野	4	1	1	2	1
菅一	3	1	2	1	1
丸岡	5	4	1	0	0
今田	3	0	0	2	1
澤田	4	2	0	0	1
中成	4	2	0	0	2
石澤	1	1	1	0	0
石山	0	0	0	0	0
石川	0	0	0	0	1
水木	0	0	0	0	0
田中	0	0	0	0	0
前田	0	0	0	0	0
犠打	1	1	0	1	0
犠失	1	1	0	1	0
犠残	1	1	0	1	0
合計	11	10	17	36	126

【八学光星】打安点振球

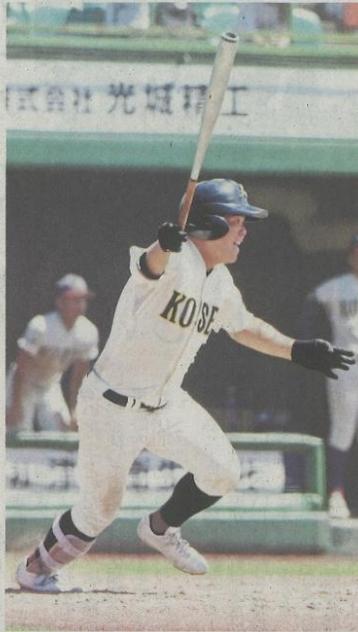
光田	4	1	0	2	2
押田	4	2	1	1	1
中久	3	0	0	0	0
保原	1	0	0	0	0
米山	4	3	1	0	1
山上	5	2	3	0	0
中瀬	5	2	2	0	1
押田	4	2	0	0	0
中久	0	0	0	0	0
関根	1	0	0	0	0
北谷	1	0	0	0	0
柴田	0	0	0	0	0
及川	0	0	0	0	0
藤原	0	0	0	0	0
佐藤	1	0	0	0	1
石原	1	0	0	0	0
犠打	4	0	2	1	1
犠失	4	0	2	1	1
犠残	4	0	2	1	1
合計	40	21	14	34	125

投手 打安振球失

芹川	6	1/2	29	8	5	3	3
水木海	1	1/2	8	1	0	3	0
田中志	1	1/2	2	0	0	1	0
前田	1	1/2	7	3	1	1	2

北口 7 27 6 10 1 1
柴田 1 3 1 0 1 0
及川 1 3 8 4 0 1 5
佐藤 1 2 1 0 0 0

得点機生かし切れず



【決勝・弘学聖愛「八学光星」9回 八学光星無死、二塁、山手人が右中間を破る。二点満塁一塁打を放ち、5-0にリード。

決め手欠き「最後は力不足」

焦点

監督は「今年のチームは本物の強さがなく、ここまで何とか踏ん張ってきたが、やはり最後は力不足だった。喉いた。初回の死、二塁から連打で2点を先制する上々のスタート。しかし、三回一死満塁の場面で「4-6-3」の併殺とされるなど、その後は、三-1-6で迎えた最後の攻撃戦を打ち崩せない時間が続いた。無死、二塁からタイ



スタンドへのあいさつ後、崩れ落ちる八学光星ナイン



【決勝・弘学聖愛「八学光星」9回 先頭打者を四球で逃がせ、八学光星の捕手米澤悠馬(左)はマウンド上で三番手及川流汰に声をかける。

光星猛攻止めきれず

勝利を目前にした九回、張り詰めていた糸が切れた。八学光星は2点リードの九回に相手打線の猛攻に投手陣が耐えきれず、息を整

自慢

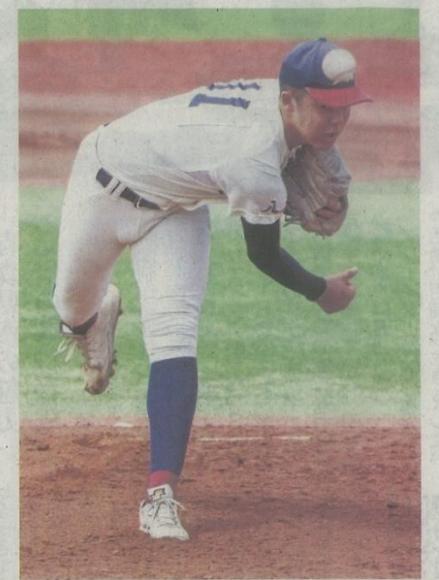
える間もなく失点を喫した。この回の投手をリードした米澤悠馬は「なんで打たれたのか分からない。相手に勢いがあつたと汲々

先頭への四球から暗転 捕手米澤「なんで打たれたのか」

と振り返った。バッテリーが悔やんだのは、逆転を許すきっかけとなった先頭打者への四球だった。三番手の及川流汰は「変化球が前めに浮いてしまっていた。大事な場面だったから、悔しい」と無念の表情を浮かべた。及川は四球の後、2死まで追い詰めたが、連投を浴びて逆転を許し、四番手の佐藤悠貴も流れを断ち切れず、リードを広げられた。米澤は「2人の球もよかつたし、自分のリードにも反省はない。相手打線が上手だった」ときつぱりと語った。八回まで7安打1失点とチームは粘り強い守備で最小失点に抑えていた。ただ、九回は何かがはじけたように失点が続いた。走者が出る度に盛り上がる相手ベンチ、応援団とは対照的に光星ナインは地に足が付かない状況だった。同点に追いつかれ、2死、「三塁の場面で及川が投じたのは、三番自信のある一直球。外角低めに決まったボールは無情にも中前にはじき返された。及川は「頭が真っ白になった。悪いボールではなかったと思つ」と、暴に悔しさがにじんだ。

(上村公徳)

ムリで1点差に詰め寄る意地を見せた。ただ、三走が挟殺されるミも響き、つかみなけた勝利は惜しくもほれ落ちていった。田中楓は「思われるように取れなかったことが敗因。八回に見決めていれは、状況は変わったはずなのに」とあふれる涙をぬぐって託した。(小嶋嘉文)



【決勝・弘学聖愛ー八学光星】7回6安打1失点、10三振と好投した八学光星の先発北口晃大

北口7回1失点好投

「完投したかった」「悔しい」

○：八学光星は今大会これまで登板のなかった北口晃大を先発マウンドに送った。7回6安打1失点、10の三振を奪う好投を見せたが、チームの勝利には結びつかなかった。完投しなかった。体力が足りなかったと肩を落とした。

スライダーとチェンジアップを効果的に使い、三振の山を築いた。「制球がよかった」と語る通り、四球は一つもなく、変化球を安打にされた場面はわずかだった。

ただ、終盤になるにつれてカウントが悪くなる場面が増えた。「下半身で踏ん張れなくなり、体が前に突っ込んでいた。フォームが崩れた。最小失点で抑えていただけに無念の降板だった。

後続の投手が相手打線につかまり、九回に5点を失って逆転負けを喫した。「最終回というのは何があるか分からないもの」と仲間をかばいつつ、「マウンドを降りて負けたことが悔しい」と言葉を振り絞った。

光田悔しき「勝てた試合・・・」



9回八学光星2死1、二塁、一ゴロで最後のバッターとなった光田昌太郎(中央)

○：リードオフマンとしてチャンスメイクに徹した八学光星の光田昌太郎。「勝てた試合を落とすという気持ち。悔しくて仕方ない」とうなだれた。

初回に四球、七回には左越え一塁打で出塁。仲間の安打でそれぞれ一気に本塁を陥れるなど、自慢の足で魅せた。

5-6で迎えた九回2死1、二塁、「あれこれ考えず、来たボールを強くたたいた」。しかし結果は無念の一ゴロとなり、この試合、最後のバッターとなってしまった。

レギュラーに定着したのは今春。「冬場の練習を経て大きく成長できた。この最高のチームで甲子園に立ってみたいかった」と思いをこぼした。